

(11-VI-1972)を現在手許に保管している。こちらの方は可成り少ない種の様で野村氏は奈良・三重県を記録しておられ(1976), 石田・藤岡氏によると分布は本州(近畿)となっている(1988)。

(JUNE・1988)

兵庫県産テントウムシ数題

(兵庫県甲虫相資料・214)

高橋 寿郎

筆者はかつて兵庫県産のテントウムシをまとめさせて頂いたことがある(兵庫生物 Vol. 3, No. 4: 258-264, 1958. Vol. 4, No. 2: 96, 108, 1961)。その時点で兵庫県下から38種のテントウムシを記録した。兵庫県産と云っても神戸市が中心の調査で大変不十分なまとめであった。その後出来るだけ県下の調査を続けて来て現時点では68種のテントウムシが県下に分布していることがわかっている。一方日本産のテントウムシのほうも研究が進展して1963年には中根猛彦博士の“原色日本昆虫大図鑑 II, 甲虫”が出版され、1971年には佐々治寛之博士の大著“Fauna Japonica, Coccinellidae”が次いで1985年に同博士によって“原色日本甲虫図鑑(III)”と出版これらにより日本のテントウムシの同定も可成り小形種を除いてはしやすくなってきた。

兵庫県のテントウムシもまだ調査不十分な点を多く残しており少なくとも70種以上のテントウムシを産するのであろうと考えてはいるがここらあたりで再度県下のテントウムシ相をまとめておいたほうがいいのではと思っているが何分にも長文になるので発表の機会が得られず困っている。そこで今回は2, 3の県下産テントウムシの種に就いて報文をまとめて見た。

○ ズグロツヤテントウの県下の産地

ズグロツヤテントウ *Serangium punctum* Miyake は宮武睦夫氏が1963年に愛媛県産1♀と兵庫県扇ノ産1♀によって新種として記載された種である(Trans. Shikoku Ent. Soc. Vol. 18, No. 1, P. 13-14)。兵庫県産のものは Paratype で辻 啓介氏が1961年6月11日に扇ノ山で

採集されたもので大阪の芝田太一氏の所に保管されている標本となっている。その後佐々治寛之博士は上記種に続いて新種記載された北海道産 *Serangium ezoense* Miyatake が *S. punctum* のシノニムであるとされると同時に新しく和名ズグロツヤテントウの名を与えられ原色で図説♂交尾器の図をつけて発表された (*Fauna Japonica*, P. 57-59, pl. II-2 ; Fig. 14D-F, 1971) (原記載には全く図が無い)。そして分布は北海道, 本州, 四国となっている。1985年に佐々治博士は再び原色で図説されたが分布に九州が加わっている (原色日本甲虫図鑑Ⅲ, pl. 40, f. 4, P. 246)。小さい種で (体長1.8—2.2mm) 佐々治博士によると“山地性でやや少ない”となっている。

兵庫県下での記録は前記扇ノ山以外全く知られていないが筆者の手許には筆者自身が音水渓谷で採集した (15-VII-1973) *lex.* がある (この標本は原記載者宮武睦夫氏に同定していただいたものでありここに同氏に対し厚く御礼申しあげさせて頂く)。一応県下では珍しい種と思われるので記録しておく。

○ ヨツモンヒメテントウ兵庫県に産す

ヨツモンヒメテントウ *Nephus yotsumon* (H. Kamiya, 1961) は佐々治寛之博士 (旧姓神谷寛之) が山梨県甲府市と大月市産標本で新種として *Scymnus* (*Nephus*) *yotsumon* として記載された種である (*J. Fac. Agr. Kyushu Univ. Vol. 11, No. 3: 287-288, pl. 38-F; Fig1-G, Fig: 2-F, Fig. 3-B, 1961*)。その後同博士は原著 *Fauna Japonica: Coccinellidae* に原色で図説された (P. 125-126, pl. IV-15; Fig: 47) (学名は上記の様に *Nephus* 属の種として取扱う)。その後1985年の原色日本甲虫図鑑 (Ⅲ) にも原色で図説された。分布は本州, 九州で少ないが樹皮下で越冬中のものがしばしば採集されるとある。小さい種ではあるが上翅上の前後に並んだ2つの小赤紋で割合同定し易いと考えられるが従来から県下の記録はなかった様に思われる。今回加東郡社町三草で叩網によって *lex.* 採集することが出来たので (1987年6月26日) 兵庫県初記録の種として報告させて頂く。

○ ウスキホシテントウとジュウロクホシテントウについて

戦前1940年に平山修次郎著原色甲虫図譜にウスキホシテントウ *Synharmonia hirayamai* Yuasa (pl. 52, f. 23, P. 170) とジュウロクホシテントウ *Neomysia nipponica* Yuasa (pl. 52, f. 38, P. 172) が原色で図説された。そしてその序文の所でこの2種はいずれ湯浅啓温博士によって新種として発表される筈のものであると書かれている。図示されたのは前者は長野県浅間山産のものであり (1939-VII-15), 後者は東京井ノ頭産 (1938-VI-13) のものであった。このうち後者の種は筆者も戦前神戸市で採集していた。とこ

ろがこの新種記載はその後長い間発表にならなかったが1963年にやっと記載として発表された (Frag. Col. pars. 3 : 12)。同じ年中根猛彦博士は原色で図説をしておられる (原色日本昆虫大図鑑Ⅱ甲虫。後者の和名はジュウロクホシテントウとされている)。1971年にと佐々治寛之博士の大著 "Fauna Japonica : Coccinellidae" が発表になりその中で共に図説された (前者 p.259, pl. XⅢ-11. 後者 p.273-274, pl. XⅣ-15. 後者の和名はシロジュウクホシテントウとなっている)。

1982年に S. M. Iablokoff-Khuzorian は "Les Coccinelles, Coleopteres-Coccinellidae. Tribu Coccinellini des regions Paléarctique et Orientale" なる568p. からなる大著を発表になっておられる (この本の紹介は佐々治博士のものがある。甲虫ニュース, No. 60 : 8, 1982)。

その中で前者の *Synharmonia* の属は *Oenopia* Mulsan, 1950 属のシノニムとされ (p. 398), この種は *Oenopia hirayamai* (Yuasa) とされている (p. 425~426)。そして後者は *Sospita* (*Myzia*) *oblongoguttata* (Linné) の亜種 *nipponica* (Yuasa) とされている (p. 159-160, fig. 226) (基亜種は中国, シベリア, ヨーロッパ, 北アメリカに広く分布していると)。そして佐々治博士の1985年の原色日本甲虫図鑑Ⅲ (pl. 43, f. 8, 16, p. 263-264) にその学名が用いられている (和名は後者にジュウロクホシテントウが使われている)。

共に日本ではそれ程珍しい種ではないようであるが兵庫県下では案外と記録が無い。どうも調査が足りないテントウムシのようでありもっと広くいる様に思うのだが——。

—応現時点での採集・記録をのべると次の通りである。

ウスキホシテントウ *Oenopia hirayamai* (Yuasa, 1963)

産地：川西市笹部 [仲田, 1978, 1982]。神戸市六甲山 [lex., 18-V-1941, T. Taniguchi leg., H. Sasaji, 1971], 山の街 (lex., 7-VI-1959) 逢山峽 (lex., 28-VII-1987)。美濃郡吉川町奥山 (2exs., 10-VI-1986)。出石郡出石町中村 [高橋, 1963], 城崎郡三川山 [高橋, 1975]。

尚本種と同じ属 (従来 *Protocaria* 属) のムツキホシテントウ *Oenopia scalaris* (Timberlake, 1943) の県下からの記録はこれまで全く無かったが筆者は次の産地のものを所有している。

西宮市香櫛園 (lex., 2-V-1941)。神戸市山の街 (lex., 15-VIII-1949)。

ジュウロクホシテントウ *Sospita oblongoguttata nipponica* (Yuasa, 1963)。

産地：川西市大和 [仲田, 1970, 1978, 1982], 能勢口 (lex., 5-X I 1977)。神戸市六甲山 (lex., 23-VI-1962, lex., 4-VI-1987), 再度山 (lex., 19-V III 1939)。氷上郡山南町 [高橋, 1961]。

(DEC. 1987)